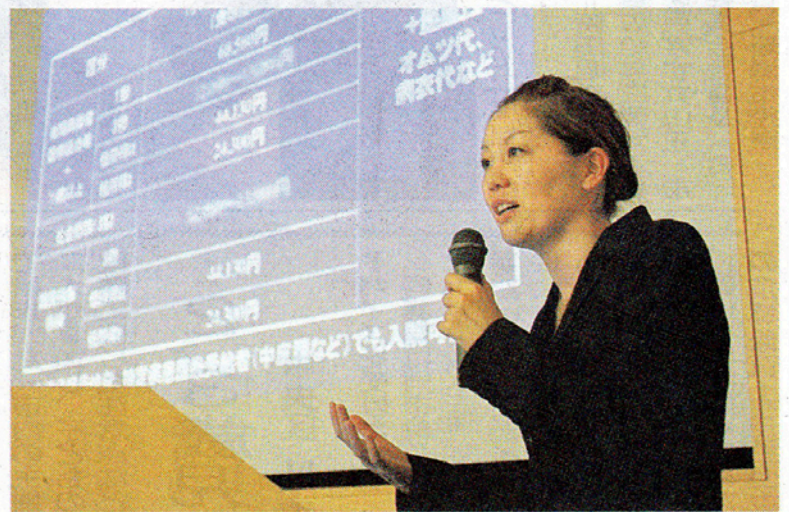


九月下旬。新潟市民病院（新潟市中央区）で、白根大通病院ホスピス（同南区）の山田理恵医師（三）が講演した。一九八一年に日本初のホスピスを開設した聖隷三方原病院（静岡県浜松市）で、四月まで三年間勤務していた山田医師。実は、その直前の一年間、同市民病院緩和ケアチームの一員だった。

担い手育成

明する姿に、同チームの片柳憲雄医師（五）がつぶやいた。「彼女の経験は本県の財産になる。緩和ケアを広める心強い同志になって帰ってきてくれた」

緩和ケアを担う人材は不足している。治療と同時に緩和ケアを進めることの重要性をう



医師、看護師らにホスピスの役割や費用について講演する山田理恵医師。緩和ケアの担い手を増やそうと懸命だ。新潟市中央区の新潟市民病院

っと追い風が吹いてきた」と感慨深そうに話す。

医師の卵たちにも、緩和ケアにつながる教育が始まっている。

新潟大は二〇〇〇年、患者とのコミュニケーションや終末期ケアを学ぶ二カ月間のカリキュラムを設けた。学生はアイコンタクト（目を使った合図）やうなずきなど、会話の基本的な技術と態度を学んでいる。

ただ、医療現場は、こうした機運の盛り上がりを手放しで喜んでいくわけではない。猫の目のように変わる医療政策への警戒感が常にある。同研究会メンバーで豊栄病院外科部長の斎藤義之医師（四）は「風向きが変わる前に、国の後押しがなくとも人材が育つ態勢を整えなくてはいけない」と気を引き締めている。

まず指導者の研修を

基本習得へ法整備追い風

たった、がん対策基本法が昨年施行されたが、「今はまだ、現場の指導者を指導する段階」と山田医師は指摘する。首都圏や先進地で学んだ医師の経験は貴重な情報となるのだ。

実践形式の研修では、二日間で患者への病状の伝え方や言葉の選び方を確認し、医療用麻薬の基礎を学ぶ。研修プログラムは、

医師有志らによる勉強会、二日間で開催される新潟県緩和ケア研究会の会報、二日間で患者への病状の伝え方や言葉の選び方を確認し、医療用麻薬の基礎を学ぶ。研修プログラムは、

めると縁田芳久医師（五）は「二〇〇〇年、患者とのコミュニケーションや終末期ケアを学ぶ二カ月間のカリキュラムを設けた。学生はアイコンタクト（目を使った合図）やうなずきなど、会話の基本的な技術と態度を学んでいる。」

「治しさえすればいい」という時代は終わって、いという時代は終わって、二〇〇〇年、患者とのコミュニケーションや終末期ケアを学ぶ二カ月間のカリキュラムを設けた。学生はアイコンタクト（目を使った合図）やうなずきなど、会話の基本的な技術と態度を学んでいる。」

すみか

居場所 求めて

めると縁田芳久医師（五）は「二〇〇〇年、患者とのコミュニケーションや終末期ケアを学ぶ二カ月間のカリキュラムを設けた。学生はアイコンタクト（目を使った合図）やうなずきなど、会話の基本的な技術と態度を学んでいる。」